

<以前の学校2> 青梅市立第八小学校 2

成木学校 校舎落成式

明治14年(1881)に長全寺から今の地へ校舎を移しましたが、校舎落成式の際に当時の神奈川県令(今の知事にあたります)野村靖氏が来校し、現在、成木小学校の応接室にある「成木学校」の書を残しています。



成木小学校応接室 野村 靖 氏の書

※野村 靖(1842~1909)氏は、長州藩士、吉田松陰の元で学び、岩倉具視とともにヨーロッパを訪問しています。のちに大臣もされていた方です。

機会があれば、応接室を覗いてみてください。

希望の碑

成木小学校の校庭にある「希望の碑」をご存じでしょうか。以前は体育館のところにヒマラヤ杉と一緒にあったそうですが、新体育館建設のために移設しました。碑には以下の文が刻まれています。(訳文と比較できるよう番号で区切っています)

碑文は昭和21年(1946)、成木に疎開中だった文学博士 五十嵐 力 先生が残したものです。五十嵐先生は、早稲田大学文学部国文科主任教授、文学部長を務めていた方です。



『1 多摩の成木の里は青垣山四方を周りに成木川その間を流れ、2 或は瀧津瀬を飛ばし或は銀蛇をくねらしてあまねく国土を肥やし 3 麦生諸生を始めとしてさわの田那つ物青物四季を通じて緑の美観を絶さず。4 民族純撲にして生業に勤しみ

5 公事に尽くし私事に譲り 6 殊に子女を愛しみて望を其の将来に懸く。7 名刹安楽寺に杉銀杏櫻の三巨木あり。いずれも千年の老樹にして或は針葉常磐の壮観により或は潤葉黄緑の美観によりて雲を凌ぎつつ郷人の志気を鼓舞す。8 実に老樹は国の宝なり。9 而して灌木蔬菜花卉の類うら若き色彩をその間に点綴し 10 新陳交替せしめて人の世の理想の両端を暗示す。11 若き農村成木の長へに伸び長りて成木する将来や実に頼もしいふべし。12 こたび我が成木国民学校増築その功を竣ふるに当り特に高遠の希望を掲げて村の将来を頌ふ。13 後に来る者よく奮闘努力せよ。

14 丈高き遠き行手を望みつゝ 日日をいそしむ我が成木かも  
山めぐり川うるほして成木野の 麦生諸生は緑次ぎ続く 』

<裏面に続く>

難しい言葉が多いため、AIにより現代語訳にしてみました。

『1 多摩の成木の里は、四方を青々とした山々に囲まれ、その間を成木川が流れています。2 川のせせらぎは時に激しく、時に銀色の蛇のようにゆったりと曲がりながら田畑を潤しています。3 そのおかげで、麦やサツマイモ、そして季節ごとの野菜が豊かに育ち、一年中緑の絶えない美しい景色が広がっています。4 ここに住む人々は素直で働き者です。5 公共のために尽くし、他人を思いやる心を持っています。6 特に子供たちをととても大切にしており、その将来に大きな夢を託しています。7 名刹・安楽寺には、杉、イチヨウ、ケヤキという三本の大きな木があります。どれも樹齢千年に及ぶ老樹で、針葉樹の常緑の雄大な姿や、広葉樹が黄や緑に色づく美しさによって、雲をも突くほどそびえ立つその堂々とした姿は、村の人々を元気づけています。8 まさに「古い樹は国の宝」です。9 その一方で、足元には若い草花が鮮やかに彩りを添えています。10 この「古いものから新しいものへと引き継がれていく姿」こそ、人間社会の理想といえるでしょう。

11 若々しい農村である成木が、これからも木々が育つように大きく発展していく将来は、本当に頼もしいものです。12 このたび成木国民学校の増築が無事に終わったことを記念し、村の輝かしい未来を願ってこの言葉を贈ります。13 あとに続く若者たちよ、一生懸命に努力して頑張ってください。

14 背の高い、はるかな行く先を見つめながら  
毎日せっせと働いている、これこそまさに私たちの成木なのだ。  
山が取り巻き、川がうるおいを与える成木野には、  
麦畑や芋畑が、緑を連ねて一面に続いている。』

疎開してきた五十嵐先生が、公共のために尽くし、他人を思いやる心をもつ成木の住民の姿、暮らしぶりを目の当たりにし、その想いを文章にされたのではないかと思います。この碑ができてすぐ、昭和22年(1947)に成木小学校を仮校舎としてスタートした青梅市立第七中学校の校歌は「希望の碑」が縁で、五十嵐先生の高弟であった早稲田大学教授の岩津資雄先生が作詞をされています。

七中の校歌に「あふぐ希望の 碑文は昂く 負へるわれらが 使命は重し」という一節があります。岩津先生が「希望の碑」の最後にある『後に来る者よく奮闘努力せよ』と書かれた五十嵐先生の意をくんで、校歌として残したのではないのでしょうか。

今でも成木で学ぶ者の心に強く響く言葉となっていると感じています。

【出典】青梅市教育史1997 新たなる出発 青梅市立第八小学校閉校記念誌1996

青梅市文化財ニュース第365号2018

五十嵐力先生ご夫妻を偲ぶ 1980

【監修】若林 博司

ちなみに14の詩をAIで現代風にすると  
高く掲げた遥かなる理想の未来を じっと見つめながら  
今日という一日を ひたむきに、誠実に積み重ねてゆく  
ああ、ここが私たちの、誇り高き成木の里。  
青き山並みは優しく巡り 清らかな水は大地を潤して  
ひろがる成木の野辺には  
麦の穂波も、蒔(いも)の青葉も  
みずみずしい緑のバトンを繋ぎながら、  
どこまでも、どこまでも続いてゆく。